

「第二の誕生」

高田正城

1. 消えない灯明（あかり）

むかしむかし、おしゃかさまがおられたころのインドのある町にナンダーという名前
の少女がいました。

ナンダーは小さいときお父さんお母さんをなくし、貧しく身よりのない身で、何をす
る気力もすべもなく、道端にたたずむ毎日を送っていました。

ほろほろな着物、ほさほさの髪の毛のナンダーを見て、ほとんどの人が避けて通りまし
たが、気の毒に思った、わずかの人がくれる食べ物のおかげで、なんとか命をつないでい
ました。

今日も、お母さんに手を引かれた子供が、楽しそうに笑いながら通り過ぎていくのを見

て、ナンダーは思いました。

「お父さんお母さん、どうして私だけを残して死んじゃったの……」

「私、もう、お父さんお母さんの手のぬくもりも忘れちゃったよ……」

「私、一体何のために生まれて、何のためにこんな苦しみを生きていくのかな？」

ナンダーは、お腹を空かせて道端にすわっていました。そこに人々のうわさ話が聞こえてきました。

「おしゃかさまのお話はすばらしい。すがすがしい気持ちになって、生きる勇気がわいてくるんだよ……」
「でも、残念なことに、おしゃかさまは明日には別の町に行ってしまう。今日の晩が最後の機会なんだよ……」

その言葉を聞いたときに、ナンダーの心の中で何か熱いものが生まれました。

「貧しくひとりぼっちで、何のために生きているのかわからない私だけれど、おしゃかさまのお話を聞いたら、何か変わるような気がするわ」

ナンダーはぜひおしゃかさまのお話をききたいと思いました。

でも、お話を聞くためには、おしゃかさまに供える「あかり」を持っていかなければな

りませんでした。

いれものに油をいれ、芯をいれてそこに火をつけて持っていくのです。しかし、ナンダーには油を買うお金はありませんでした。

ナンダーは今までにない決心をしました。町じゅうを歩いて、「あかり」を買うためのほどこしをしてもらおうと思ったのです。

ナンダーは朝から夕方まで、足を棒のようにして歩き回りました。断られた家も沢山ありましたが、それでも少しの食べ物をもらうことができました。「ああ、これであかりをお供えできる」お腹はすいたけれど、ナンダーの心はさわやかでした。

ナンダーは、早速油屋さんに行きました。

そして、食べ物を差し出して、

「これで買えるだけでいいですから、油を売って下さいな。おしゃかさまにおそなえするあかりのためなんです」と言いました。

油屋さんは親切な人でした。

「お腹がすいているだろう。その食べ物はあるが食べなさい。油はあげるからね」

しかし、ナンダーはきつぱり言いました。

「どうかこれだけはもらって下さい。もらっていたただかないと、私はおしゃかさまの教えを聞く資格がないのです」

ナンダーの真剣なまなざしに、やさしくうなずいた油屋さんは、油を売ってくれました。お礼を言ったナンダーは、早速おしゃかさまの元へ急ぎました。

おしゃかさまがお話になる席の前には、たくさんの人がおそなえした、りっぱな「あかり」があかあかと燃えています。

ナンダーはそれを見て、自分の「あかり」があまりに小さく、みすばらしいので、恥ずかしくなりました。

しかし「私は私にできることを心をこめてすればいいんだわ」

そう思い直して、自分の「小さなあかり」に火をつけ、りっぱなあかりがならんでいるかたすみにそっとおきました。

いよいよおしゃかさまのお話が始まろうとしたときです。とつぜん強い嵐が町を吹き荒れ、おしゃかさまのいらっしやる所にも激しいいきおいの風がぴゅーっと吹き込んで

きました。

そのために、おしゃかさまの前におそなえしてあった、たくさんのりっぱな「あかり」も一度に消え、あたりは一瞬で真つ暗な闇に包まれてしまったようでした。

ところが、よく見るとすみのほうに置かれた、みすぼらしく、小さなあかりだけが、あの強い風にも消えないで、静かに燃え続けているではありませんか。

「あのりっぱなあかりでさえ消えたのに、なぜこんなちっぽけなあかりだけが消えなかったんだろう？」人々は不思議に思いました。

その時です。それまでだまっていらつしやつた、おしゃかさまがこうおつしやいました。「このあかりを消すことが出来るものはいないだろう。なぜなら、このあかりはまごころをこめてささげられたあかりなのだから……この世界を吹き飛ばすほどの嵐が吹いたとしても、このあかりだけは決して消えることがないであろう。そして、私の教えとともに、いつまでも燃えつづけるであろう」

ナンダーは涙を流しながらおしゃかさまのお話をきいていました。

「生まれてきてよかった。生きていてよかった」「私もきつと、あかりをともせるようなひとになろう。そして、いつまでもいつまでもこのあかりを消さないようにしよう」とかた

く心にちかいました。

長い長い年月がたち、おしゃかさまもナンダーも世を去りましたが、それでもこの「あかり」は消えることなく燃えつづけました。「あかり」は砂漠の道を通り、海を渡って日本にも伝わってきました。

そして、また長い長い時が流れます。

みなさん、こんにちは、先ほどご紹介頂いた、高田正城と申します。

人間には一生の間、二回の誕生がある。一回目はお母さんのお腹から生まれる、生き物としての誕生。そしてもう一回は、苦しいことや悲しいこと、そしてかけがえのないひととの出会いを通じて、さらに大きなのちの願いに目覚めていくとこと、それこそが「第二の誕生」なのだと思います。今日は六人の人の「出会い」のエピソードを紹介しながら、みなさんとともに「第二の誕生」について考えてみようと思います。ただいまの「消えない灯明」は、その一つ目の物語でした。光華女子学園の学園訓「真実心」につながるテーマの話ではないかと思えます。

2. あるあるある

日本の明治時代から昭和にかけて、岐阜県の飛騨高山で生まれ、七十二年の生涯を終えた「中村久子さん」という女性がいます。今から十七年前の平成十四年に、この光華女子学園でも、『中村久子の世界展』という名称で遺品展を開催したことがあります。

明治三十年に生まれた久子は、わずか三才の時、突発性脱疽だっそ（細胞が壊死する病気）のため、両手両足を切断することになります。

やがて、献身的に久子の世話をしていた父が、過労と心労のために急死。

次々と襲う苦しみと悲しみに打ちのめされ、思い余った母はついにある夜、久子を背負い死に場所を求めて町をさまよい歩きます。

「かか様、どこへ行くの？」「かか様とよいところへいこうなあー」

やがて母がたたずんだ場所は町を遠くはずれた川の上流でした。

「ひさ、かんにんしてなー」

振り向いた母の顔から、涙のしずくが久子の顔に落ちました。じいっと身動きもせず、いつまでもそこにたちつくしている母。

足下では、大雨で水かさの増した川の激流が、ものすごい水音を立てて流れています。その時でした。背中の久子が、「かか様、こわいよー。早くおうちへ帰ろう」と叫んだのです。

久子の「生きたいと願う力」を感じ、我に返った母は、自分がいなくなっても、両手両足のない久子が一人でいきっていけるようにと、食事や裁縫など日常の仕事について心を鬼にして厳しいしつけを始めることになります。

例えば、久子の前に着物を持つてきた母は、はさみを使って糸を切り、ほどきものをするように久子に命じます。

「私は、ほどきものはようしません。はさみをどうして持つのですか？」久子が聞くと、「はさみを持つことは自分で考えてやること。考えてやりなさい」と母は答えます。

久子が「なんぼ考えてもはさみを持ってません。かんにんしてください」と言うと、母は「できないからといってやめてしまったら、人間は何にもできません。どんなことでも努力して生きていくのが人間なのです。できないことはないはずです。やらねばならんとい

う一心になつたらきつとやれるものです。このほどきものをしなさい」とつきはなします。

理屈はわかつて、あまりの厳しさに、久子は母を恨み、「自分は本当の子ではないのかもしれない」と思います。

しかし、負けん気の強かった久子は、母の願いと徹底的なしつけに応え、血のにじむような努力を重ね、ついに口を使って何でもできるようになります。

だれの力も借りず、小刀で鉛筆を削り、口で字を書き、歯と唇を上手に動かして両腕の先に挟んだ針に糸を通し、その糸を口の中でくるくるつと、上手に回して、玉結びができるようになりました。

反物も上手に切りそろえて、着物も縫えるようになりました。

やがて、二十才になって、精神的にも経済的にも強く自立を願っていた久子は、悩んだ末に一大決心をします。

人権の尊重が進んだ現代では考えられないことかもしれませんが、口で筆をくわえて字を書いたり、短い腕と口を使って裁縫する姿を舞台上で演じて人に見せるという、見世物小屋の芸人になることを決意したのです。

久子は全国から海外への巡業の旅に明け暮れます。

そんな日々の中、久子に故郷から一通の便りが届きます。それは母の死を告げるものでした。その時、久子の心に稲妻のようによみがえってきたのは、幼い自分を背負って、濁流の川をじっとみつめていた母の姿でした。

両手両足のない私を抱えて、世間の冷たさや貧しさの中で、一人の人間として、女性として、生き抜いていけるように厳しくしつけてくれた母。その心の裏側には私に対する限りなく深い愛情があったのだ。そうとも知らず、母の厳しさを恨み続けていた私はなんと、この時、久子は母の恩を深く思い、強く生き抜いていく決心をします。

以後、久子は多くの人との出会いを通じて、一人の人間として、女性としての人生をまっとうしていきます。

そんな久子は、最後に人生の中で最も大きな出会いを果たします。それは、今、みなさんの正面にある「南無阿弥陀仏」との出会い、親鸞聖人の教えとの出会いです。

この出会いによって、久子は「私を救ってくれたのは、両手両足のない、この私自身の

体であった」と言い切ります。

両手両足がない、自分という存在から逃げるのではなく、それと向き合い、すべてを引き受けていく中で、悩みも苦しみも悲しみも「生かされていくよるこび」に変える生き方ができるのだと、はつきりわかったからです。

晩年の久子に次のような詩があります。

題は「ある ある ある」といいます。

さわやかな 秋の朝

「タオル とつてちょうだい」

「おーい」と答える良人がある

「ハイイ」という娘がおる

歯をみがく

義歯の取り外し

かおを洗う

短いけれど

指のない まるい

何でもしてくれる

つよい手が

断端だんたんに骨のない

やわらかい腕もある

何でもしてくれる

短い手もある

ある ある ある

みんなある

さわやかな

秋の朝

この詩を読んで、私たちはどうでしょう？

久子のように「ある ある ある」と言える私でしょうか？

本当に大切なものはすべてまわりにあるのに「ない ない ない」といつも言っているのではないのでしょうか？

人の一生は不自由、思い通りに行かないこととの出会いかもしれません。

それは避けられないことです。

しかし、そこから生じる苦しみや悲しみから決して目をそらさず、それをかみしめていく中で、はじめて見えてくる世界があり、その中で少しずつ私たちの心は深くなっているのではないのでしょうか？

「南無阿弥陀仏」とは、「自分自身をしっかりと見つめながら、二度とないあなたの人生を生き生きと生きていって下さいよ」という仏さまの願いが込められた言葉なのです。

中村久子さんは、その「いのちの願い」にしつかりと出会い、「ほんとうの人間」になつていく中で、多くの人の心に「あかり」をともした方でした。

3. 浄土への手紙

「浄土」(仏さまの世界)へ手紙を書いた人がいます。

昭和三十年頃、今紹介した中村久子は熊本県の天草で講演をします。その時、久子のお話を聞いて、心をゆさぶられた一人の女性がいました。

それは、「明瀬^{みよせ}ナツ」さん、という久子より一歳年上の女性でした。

ナツは早く夫をなくし、女手一つで八人の子供を育てあげた苦勞の人でした。

その自分の苦勞をはるかに越えて、久子の鮮烈な生きかたはナツの心に突き刺さりま
す。

ナツは、「両手両足のない久子に比べたら、自分の方がしあわせだ」とは、まったく思
いませんでした。

他人との比較でしか「しあわせ」を感じられない生き方は、けっして「ほんとうのしあわせ」ではなく、むしろ「差別」につながるものだということを、体験からよくわかっていたのでしよう。

それよりもナツは「こんな不自由に出会いながらも、今の自分を喜んで、しあわせいっぱいに生きている人がいる」ということに、魂をゆさぶられる気がしました。

思わず久子を拝んだナツは、「自分もこの人のように生きたい、自分も生きたあかしを何か形に残したい」と思い、やがて「そうだ、字を覚えよう」と決心します。

ナツは、小学校に通えなかったので、字が書けなかったのです。

それからナツは朝から夜まで、働きづめの中で字を覚える作業に熱中します。片カナで字がかけるまで、何年もかかりました。

昭和五十八年、八十七歳のナツは久子に手紙を書きます。その手紙を岐阜県高山市に法話に行くという、近所の住職に託します。

住職はおどろいて言いました。

「ナツさん、久子先生がもう十五年も前に亡くなつたことは、あなたも知つてるでしょ

う。あんときあなたはひどう泣いとられた」

「わかつとります。ばってん、この手紙は必ず浄土にとどきます。中村先生のおられる浄土に届く。どうか先生の仏壇に置いてきて下され。頼みます。どうぞ頼みます」

ナツの必死な目を見て、住職は心を打たれ、遺族に手紙を届けました。

久子の遺族が手紙を開くと、そこには、おせじにも上手とは言えない、みみずのような、しかし、いのちがきらきらと輝いている片カナの文字が紙いっぱいにおどつていました。

ナカムラ、ヒサコ、サンエ、オレイデース、

ワタシワ、マダ、イキデ、オリマース、

コノジヲ、ナラツタノワ、

ナカムラ、ヒサコ、サンノオカケゲデス、

ハチヒチマデ、ヨローコンデ、

カイトオリマース、コンナジデモ

アナタノ、オカゲデース、

ホカノコトワ、ワスレマスガ、

コノジダケワ……コノジダケワ……

(決して忘れない)

そう書かれていました。

ナツはこの手紙を書いた翌年に八十八歳で亡くなります。

たった一度の、中村久子との出遇いから、ナツは浄土に手紙をかくほどの、人間の真実をつかみました。中村久子もまた、ナツの心の中に永遠に生きました。その出遇いは夏の太陽のように燦然と輝いています。

4. 母親の足

昔、ある青年がいました。

小さいときに父親を病気で亡くしてから、母親が反物の行商をして彼を育ててきました

た。

母親は明るい性格で、おおらかに彼を育ててきましたが、たった一つ、毎朝お仏壇の前に一緒に座って手を合わせる行いだけはずっと続けてきました。そして、

「おまえも仏さまの大切な子どもです。これからも仏さまに手を合わせることを忘れないでいてね」と、いつも言い聞かせていました。

彼は、小さいときは母親の言うことを素直にきいていましたが、大きくなるにつれて、母親との生活に不満を持つようになりました。

「おもちゃも、マンガも野球の道具も買ってもらえないような生活はいやだ。仏さまに手を合わせても何にもしてくれへんやないか。ぼくはいずれいい会社に就職して、出世してお金持ちになるんや」そう心に誓います。

そして、一生懸命勉強するようになった彼の成績はぐんぐん伸びて、いつも学校では一番でした。

彼は誇らしい気持ちで、

「お母さん、ぼくが出世してお金持ちになったら、もう仕事なんかやめなよ。ぼくがきつと贅沢な暮らしをさせてあげるからね」

と、言うようになりました。そんなとき、母親はいつも少しさびしそうにほほえんでいました。

大学四年生になったとき、彼はとても有名な会社の就職試験を受験して、難関を突破し一次試験に合格します。二次試験の面接の日、彼は喜びいさんで出かけて行きました。

「政治経済でも、時事問題でも、どんな難しい質問をされても必ず答えてやる」

やがて青年の順番がきて、面接室に入っていくと、正面に座っていた社長さんから早速第一の質問が発せられました。

「君は親の身体を洗ってあげたことがあるかね？」

意外な質問にとまどった彼は、

「いや、肩をもんでやったことはありますが、母親の身体を洗ったことはありません」と思わず正直に答えました。

すると社長は、「君はお父さんを早く亡くして、母一人子一人だね」「はい、そうです」「それじゃね、今日帰ったら、お母さんの体をどこでもいいから洗ってあげなさい。そのうえで明日改めて面接する。今日はもう帰れたまえ」そう言ってもう席を立ってしまった

のです。

青年はぶつぶつ言いながら家に帰ってきました。「変な社長やな。なんでそんなあほなことせなあかんのや……」

だが、落ち着いて考えてみると、やはりどうしてもあの会社には入りたい。そのために今日まで血のにじむような勉強にも耐えてきたんやないか。ええい！やっぱり、おふくろの身体を洗わなきゃいかん。どこを洗ってやろうか？

そうや、おふくろは毎日、反物の行商をして歩いているんやから、足が汚れているだろう。足なら簡単に洗えばすむ。足を洗ってやろう。そう思って、大きなタライにお湯を一杯に沸かして母親が帰ってくるのを待っていると、やがて母親が帰ってきました。

「お母さん、お帰りなさい。今日は僕がお母さんの足を洗ってあげるよ」

ところが最近特に自分のことをバカにしている、親不孝息子が急にそんなことを言うものですか、お母さんはびっくりしました。

「イヤ、自分の足は自分で洗うわよ」

「お母さん、実は今日会社の面接に行ったら、変な社長がおってね、お母さんの身体を洗わんと面接のつづきをせんと言うんや。だからどうしても洗わんといかんのや。済まんけ

どお母さん、洗わせてくれよ」

「そう、それじゃ、しょうがないわね」母親はそう言って、上がり口に腰をおろして、息子の汲んでくれたタライのお湯の中に足をつけます。

青年はさあ母親の足を洗おうと思つて、タライの反対側にしゃがんで、何気なく母親の足をにぎつた。しかし、それから彼は化石になつたように身動きができなくなつてしまいました。なぜでしょうか？

母親の足は女の人の足だから、なんとなく細くて柔らかな足だと思つていたのに……そうではなかつたのです。彼がにぎつた母親の足は、真っ黒に汚れた、石のように硬いごつごつした足だつたそうです。その石のように硬いごつごつした母親の足を握つたとき、その青年の胸に何とも言いようのない熱いものがこみあげてきました。

父親が亡くなつてから、どんな思いで、彼のことを育ててきたのか、今まで愚痴一つ言わなかつたお母さんの、その真つ黒な、石のような、ごつごつした足が、すべてをものごといていました……

ついに青年は耐えきれなくなつて、お母さんの足をにぎつたまま、子どものように大きな声をあげて泣きました。男泣きに泣きつくしました。

青年は翌日、会社に行つてあの社長に会い、こう言いました。

「社長さん、私は小学校、中学校、高校、大学と出させていただきましたけれど、今までだれ一人、親の恩ということを教えてくれませんでした。このたび社長さんにお目にかかつて、はじめて親の恩ということをわからせていただきました」

「そして私は今まで、自分の力だけで生き、自分の力だけで幸せになつてやると思っていました。そうではないことがわかりました」

「母や、私の周りの大きな力に支えられ、生かされているのだということがよくわかりました。ありがとうございます」

「もう私はこの会社採用されても、されなくてもどちらでも結構です。でも生涯、母親を大事にしていこうと思います」

「そして母がいつも言っていた、『仏さまに手を合わせる』ということを大切にしながら、自分もだれかのために生きられるような人間になりたいと思います」

今から五十年くらい前、昭和四十年代の話だと聞いています。

5. 父親のひょうい

今から約四十年前、昭和五十四年から五十八年の間、この京都光華女子大学の学長をしておられた方が、廣小路亨先生ひろこうじしとおるです。本学の前には、姉妹校の大谷高校の校長もつとめられ、仏教の、浄土真宗の教えによる教育をひたすら実践する、尊い仕事を続けてこられた方でした。

有名な歴史小説の作家、司馬遼太郎しばりょうたろう氏とも親交があり、司馬さんは「こういう先生にめぐまれなかった過去に、ふとむなしさを持った」と語っておられます。

廣小路先生は、明治四十一年愛知県に生まれました。実家は大変貧しい農家で、ものごころついたときから、両親の一生懸命働く姿が目には焼き付いていたそうです。

先生が十歳の時、お母さんが若くして亡くなります。大晦日の晩に苦しみ出したお母さんは、元日の朝に亡くなっていかれたそうです。

その姿を見ていた亨先生は、

「わしは大きくなったらお医者さんになる。お医者さんになってお母さんのように苦しんでいるひとを助きたい」そう、強く思うようになっていったそうです。

悲しいことは続き、間もなく不慮の事故で弟さんと妹さんも亡くなってしまいました。

その後、お父さんは男手ひとつで残された子供たちを育て、亨先生も、そんなお父さんを助けて、まだ幼い兄弟たちを一生懸命支えていきます。

そんな日々の中、ある晩の食事の時に、いつもは聞き分けの良い亨先生が、珍しくお父さんにわがままを言います。

「こんなおかずでは、御飯食べられへん」

すると、これもいつものはきびしいお父さんが、その日はなぜかやさしくて、

「そうか……ほなどんなおかずやったら食べられる？」と聞いてくれたそうです。

「お母さんが昔作ってくれた卵焼きがあったら食べられる」「ほうか、ほな作ったげるさかい、ちょっと待ってな」

そう言ってお父さんは慣れない手つきで卵焼きを作ってくれたそうです。

「さあ、できたで。食べなさい」

お父さんが置いてくれた卵焼きを、さあ食べようとつまんだときです。

ふと、お父さんの方を見た、亨先生はびっくりして、食事がのどを通らなくなっていました。

お父さんは、目にいっぱい涙をためながら亨先生をじっと見つめていたのです。

「その日から、私は食べ物に文句を言ったことは一度もない。このとき、そういう私にしていただいたんや……」晩年の亨先生から、そう聞いたことがあります。

お父さんは、それからゆっくり亨先生に語りかけました。

「亨よ、今日はおまえに大切な話がある」

「おまえは、お坊さんになるために勉強してくれへんか」

「うちの家は貧しくて、とてもおまえを上为学校にやってやる余裕はないけれど、お坊さんになることを条件に、奨学金をもらえる制度がある、と聞いた」

「いや、学校のことだけやない。わしは、おまえにほんとうにお坊さんになってほしいんや」

「おまえはお医者さんになりたい、言うてたな……お医者さんになって、お母さんのように苦しんでる人を助けたい言うてたな……」

「それも大切な仕事やと思う。けど、わしはお坊さんこそ、ほんまに人を助けられる仕事

やないかと思つてる……」

「おまえのお母さんは、苦勞に苦勞を重ねて若くして亡くなつたな……おまえの弟と妹も幼いのに事故で亡くなつてしまつたな……みんなどんなに生きたかつたやろう……」

「どうか、おまえは、そういうお母さんや弟や妹のことを忘れず、心の中で生かしながら、人を支えてあげられるような、世の中のためになるような、お坊さんになつてくれへんか」

そして、お父さんは最後に亨先生が一生忘れられない言葉を口にします。

「これからお母ちゃんのことを忘れずに生きていってくれ。……わしのこととは忘れてもいいから……」そう、おっしゃつたそうです。

廣小路亨先生は、その後、一生懸命に勉強され、京都の大山崎にあるお寺のご住職になられました。そして、同時に、浄土真宗の教えによる教育を大谷高校やこの京都光華女子大学でひたすら実践する、尊い仕事を一生続けられた方でした。

自分にも厳しかった先生は教師になられてから数十年、ほとんど一度も休まれなかつたようですが、たつた一度だけ、お父さんが危篤になられたときだけ、ふるさとの家に帰られたそうです。そして、ご臨終近いお父さんの手を握つて、

「わたしは、あなたの言葉通り、お母さんや弟、妹のことを忘れずに生きて参りました」
「そして、あなたが『わしのことには忘れてもいいから……』とおっしゃった、そのことばも、決して、決して忘れずにこれからも生きていきます。ありがとうございます」
そう、おっしゃったそうです。

6. 慚愧のこころ——罪と向き合う——

以前、教誨師きょうかいしというお仕事で、拘留所に行き、死刑囚にお説教をしておられた方から、こんな話を聞かせていただきました。

それは、二十八歳の男性死刑囚が処刑される、その前日の家族との最後の面会に立ち会われた時のことでした。

その死刑囚の名前は仮に「小西保」としておきます。

保は、中学校を卒業してから、すぐに大阪のある店に勤めて、一生懸命働いていたのですが、やがて「遊び」を覚えるようになりました。

仕事が終わってから、女性を誘って夜の街を飲み歩きました。ずいぶんお金がいりま

す。

そのお金をつくるために、とうとうある金融機関から十万円というお金を借りたのですが、半年後にはそれが三十万円にふくれあがっていました。業者の人からは、毎日のようにきびしい催促が来ます。困りぬいた保はどうしたか？

ついにある夜、自分の勤め先に忍び込んで、普段見覚えのある金庫から、当時七十五万円というお金をわしづかみにして逃げようとなりました。ところが、ちようどとなりの部屋で寝ていた奥さんに見つかり「あんた、そこでなにしているの！」と、大声でとがめられます。逆上した保は、いきなりその奥さんを持っていたナイフで刺して、死なせてしまいました。そればかりか、はなれで寝ていたおばあちゃんが、物音に気づいてやってきたのを、これもまた刺し殺してしまったのです。保はそれから九州へ逃げ、やがて金が底をついて、また盗みに入ったところを、とうとうつかまってしまうました。

そして、死刑が確定するまでの三年間、大阪の拘留所におりました。

いよいよ刑の日が確定しました。処刑の前日が家族との最後の面会の日。お母さんが4人きりの家族である、お父さんと妹さんに一緒に行こうと誘うけれど、お父さんは返事をしません。お父さんは保が捕まってから会社を退職し、わずかの財産を処分して、被害者

への補償金にあて、バラックを建てて家族でひっそりと暮らしていたのです。たしかに、お父さんもつらいのでしょうか。

そして妹はこう言います。

「お母さん、わたしはお兄ちゃんがつかまってから、一生お嫁に行けなくなりました。お兄ちゃんの顔なんか、もう見たくないの……」

しかたなく、お母さんは一人で面会に行きました。

「保や、いよいよ明日旅に出るんだらう。お母ちゃんも一緒に行くからな」

そう言ってお母さんは、用意してきたきょうかたびら経帷子を見せて、

「こちらの袖におまえの名前を書いといたよ。こつちの袖にはお母さんの名前を書いといたよ。背中の南無阿弥陀仏さまと一緒に明日旅に出ような」

そうやさしく言いました。

保は最後にこれだけ言うのがせいっぱい。「母ちゃん、今まですみませんでした。親不孝の息子で堪忍してください。どうぞ、母ちゃんの方から、お父さんや妹にも謝っておいてください」「母ちゃんの気持ちはどううれしいけれど、たぶん、おれのような悪人は、母ちゃんと違って地獄に行つて、死んでからも罰を受けるんや。それだけのひどいことをお

れはやったんだから仕方がないと思う。なんで、こんなことになってしまったんかな……
今はただ、どうせ死ぬのなら少しでも早く死刑になりたいだけや……」

「そやない！」お母さんはきつぱりといいました。「保や！おまえ、それで命を奪い、傷つけた人に、罪を償った気でいるんやったら大きな間違いやで！」

「おまえが、ほんとうに罪を償うつもりやったら、人のせいにせず、自分の罪と向き会わなあかん！けだものの心を捨てて、ほんまもんの人間になって仏さんの国へ行かなあかん！」

「お母ちゃんな、こないだお寺で聞いてきたんや。仏教には、慚愧ざんきということばがあるんやて。慚ざんいうのは、自分のしたことから逃げんと、しっかり見つめて心から恥かたじけなくずかしいと思うことや……愧きいうのは、人に対して恥かたじけなくずかしいと思うことや……慚愧の心を持つことで、人間はほんまもんの人間になれるんやて。そして、人のしあわせを願える人間になれるんやて」

「おまえがしたことは、決して決して許されることではないけれど、おまえがそのことを心から悔いて、ほんまもんの人間になって、人のしあわせを願える人間になって、仏さまの国へ行くことをお母ちゃんは知っている。信じている」

お母さんの言葉をじつと聞いていた保は、胸がいっぱいになりました。

「母ちゃん。ありがとう。おれ、最後にわかった。人間にとつて一番大切なことを……」

「たくさんの人を傷つけ、取り返しのつかない罪を犯したおれやけど、はじめて、ほんまもんの人間に生まれ変わったような気がするよ。明日いよいよ旅に出るけど、母ちゃんと一緒や。もうこわいことないよ」

「そして、旅立ちの瞬間まで、みんなのしあわせを思うよ。どうか、もう人を傷つけないで、親を泣かすようなひとが出ないように……おれが最後の一人でありますように……最後まで、そう願うよ」

ついに時間がきた。鉄の扉がギイッと開いて、保は外へ出ようとする。その時が親子こん生の別れです。

ついに、いたたまれなくなつたお母さんが、金網の向こうから、それこそ腹の中からはほり出すような声で「保ーっ」って叫びました。

そして面会所の金網の、あのせまいせまいすきまから、母は出るはずのない手を一生懸命ににじり出して、「保、母ちゃんの手、にぎり」と呼びかけたのです。

母の一念というのはすごいもので、そうすると、金網のすきまから、出るはずのない手

の指先が、ほんの少しだけ出て、保はその指をさわる事ができたそうです。

お母さんは、涙の流れるその顔のまま、

「保や、今度生まれてくるときも、母ちゃんのところへ生まれてこいよ」

「母ちゃん、わしみたいなこんな大悪党、また母ちゃんのところへ生まれてきていいのかい？」「おまえも、ほんまもんの人間に生まれ変わると言うたやないか。そやったら、なおさらのこと、もう一度だけ、この母ちゃんのもとへ生まれてこいよ……ええな……ええな」

こうして、小西保はお浄土へ旅立たれたそうです。お母さんの心と一緒に……

実の父親からも、実の妹から見放された保。世間のすべての人から、「あいつは悪いやつだ」「極悪人だ」と責められた保にも、その姿をしつかり見てくれている人がありました。

このお母さんの声、お母さんの姿、お母さんの涙を通じて大きなはたらきがありました。このはたらきを、私たち浄土真宗の言葉では、「南無阿弥陀仏」と言います。

小西保という、二十八歳の男性は、取り返しのつかない罪を犯し、その責任をとるため

に死を迎えることになりましたが、その直前にお母さんのご縁を通じて、しっかりと「第二の誕生」を果たし、ほんとうの人間になって行ったのだと思います。それは、たとえ死の直前であろうとも決して意味のないことではないと私は思います。

終わりに—ほんとうの人となる—

現代の世の中で、思い通りにならない世界に出遭ったとき、人間は自分の価値を見出せず自信を喪失したり、苦しみや悲しみに飲み込まれてしまうことになります。

しかし、私たちの親鸞聖人が出遭われた世界は、「撰取不捨せんしゆふしや」の世界。決して見捨てられることのない世界です。

そこでは、自分の周りの苦しいことや悲しいことの中にこそ、ほんとうに大切なもの、ほんとうの人間となるための種があるのだとわかります。それこそ、「生かされて生きる世界との出遭い」なのでしょう。

単に将来のよりよい進路や経済的な幸福を目指すのではなく、与えられた命を「人間成就」(ほんとうのひととなる)のために生かしていく。自分がいただいた「いのちのとも

しび」を消さず、自らの為に生かすと共に、他者に対してもそのともしびを点じて、共にほんとうの人間となることを目指していく。

本学園の学生生徒と教職員が、この点において自らの真実（まこと）を尽くしていくことが本学園の目指す世界であり、社会に対する使命なのだと思います。

「光華女子学園の教育の目的は、本来の意味での人間性を回復するような教育を行っていくこと」これは、今日紹介した、元学長廣小路亨先生の言葉です。

したがって、学園訓「真実心」（慈悲の心）とは、「人間成就の願い」がこめられた言葉、大きなのちに目覚め、ほんとうの人となろう、という願いがこめられた言葉なのです。

私たちは生きていく中でいろいろな出来事に出会います。

その中には、うれしいことや楽しいこともあります、それ以上に苦しいことや悲しいことに出会うことでしょう。

しかし、繰り返し言いますが、実はその苦しいことや悲しいことの中にこそ、かけがえないひととの出会いがあり、ほんとうに大切なもの、ほんとうの人間となるための種が

あるのだということを私たちは知っておきたいと思います。

人間には一生の間、二回の誕生がある。一回目はお母さんのお腹から生まれる、生き物としての誕生。そしてもう一回は、こうした苦しみや悲しみの底から、さまざまなお会いをもらって、さらに大きなのちの願いに目覚めていくことです。

それをわたしは「第二の誕生」と呼んでいます。